

# 学校図書館を活用した教育実習生の指導

— 生徒のキー・コンピテンシー育成に資する教員養成の一端として —

東京学芸大学附属高等学校 浅田孝紀

## 目 次

1 本稿の目的と問題の所在	134
2 実習内容を決めるまで	135
3 勤務校図書館の概要	135
4 実習生A「かたはらいたきもの」の図書館授業	136
5 実習生F「九月ばかり」の図書館授業	137
6 おわりに	139
[注]	140

# 学校図書館を活用した教育実習生の指導

— 生徒のキー・コンピテンシー育成に資する教員養成の一端として —

東京学芸大学附属高等学校 浅田 孝紀

## 1 本稿の目的と問題の所在

本稿は教育実習生指導の実践報告を目的とする。理論的背景や先行研究・先行実践に基づく学術的な観点からのものでなく、あくまでも「覚え書き」であり、簡単な記録にすぎない。しかし、教育実習生に対して学校図書館を活用した指導をおこなった実践報告等は、管見の限り見当たらない。東京学芸大学では「先生のための授業に役立つ学校図書館活用データベース」を公開しており<sup>1)</sup>、ここには教育実習生が学校図書館を使った記録も掲載されている。だが、論文や実践報告として文献にされたものは存在していないと思われる。そのため、粗いものではあるが、これを残しておくこと自体に価値があると考え、まとめることとした。

本実践報告は、国語科の教育実習生に対し、勤務校の図書館を活用した授業を一定程度要求し、実施したものである。これ以前、一昨年に担当した実習生が「図書館を使って授業をやりたい」と言い出し、古典分野で物語の背景や関連する話を見つけて考えさせ、教科書教材の理解に資する活動をおこなったことがあり、今回の実践はこれを指導教諭の側から意図的・計画的におこなわせようとして実施したものである。筆者は司書教諭の資格は持っていないが、2017年度現在、勤務校内での校務分掌で「図書部長」に任じられており、そのため学校教育における図書館の有効活用を日常的に考えている。

ところで、勤務校に限らず国立大学附属学校は、ほとんど全ての学校が、附属する大学の教育実習生の指導を行う使命を持っている。ところが、多くの学校で「教育実習生の力量不足」を嘆き、ややもすれば教育実習生の受け入れに消極的な声もしばしば聞かれる。確かに力量は不足しているが、それは大学生なのだから無理からぬことであり、これを大学のみの責任に帰したり、実習生を邪魔者扱いしたりするのは附属学校教員としての責務の放棄に等しい。そして教育実習を教師の力量形成の観点から見た時、教室での授業のみならず、図書館の活用を実習段階で行わせることは、附属学校図書館の存在意義としても重要であると言えよう。実習生の教師としての力量形成のためには、図書館やICT機器などの学校にあるリソースも積極的に活用していくべきである。一方、これは生徒たちのキー・コンピテンシーの育成に資することにもなる<sup>2)</sup>。ここでいう「キー・コンピテンシー」とは、OECDにおけるものであることは言うまでもない。文部科学省のサイトに掲載されている「OECDにおけるキー・コンピテンシー」によれば、

- ① 社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する能力（個人と社会との相互関係）
- ② 多様な社会グループにおける人間関係形成力（自己と他者との相互関係）
- ③ 自律的に行動する能力（個人の自立性と主体性）

の3つであるが、図書館において、解決すべき課題を蔵書やICTを活用しながら、グループのメンバー全員の力を結集して解決していくプロセスを通して、①～③のすべてが身についていくことになるかと筆者は考えている。殊に①と②には深く関わってこよう。

こうした筆者の問題意識に基づき、今年度（2017年9月）に担当した6名の実習生に対し、図書館を使った授業をなるべくやるように促したところ、2名の実習生が実施した。この6名は、いずれも高校時代に学校図書館で授業を受けた記憶はないとのことであった。自分自身に経験のない授業は発想しにくくて当然である。そのため、図書館のどのような資料をどのタイミングで使わせ、どのように活用させるかを全員で考えさせ、そこに筆者が助言を与えて授業を実施させるという方向で指導した。

## 2 実習内容を決めるまで

東京学芸大学の教育系（教員免許取得が卒業要件になる）の学生には、「基礎実習」「応用実習」という名称の必修実習が課されている。

うち、初等教員養成課程（A類）の学生は、3年次秋に附属小学校で「基礎実習」、4年次初夏に協力校（小学校）で「応用実習」を受ければ小学校の免許が取得できる。これに加えて、中学・高校の免許を副免許で取得する者には、4年次9～10月に附属中・高で「選択実習」（6月に行われる実習校でのオリエンテーションも含めて2週間）が課されることになる。

一方、中等教員養成課程（B類）の学生は、3年次秋に附属中・高で「基礎実習」、4年次初夏に協力校（中・高）で「応用実習」が課されることになる。なお、初等免許も必要要件を満たせば取得可能である。

本実践報告で主な対象とする学生は、A類選択実習生で2017年9月25（月）～10月5日（木）に担当した6名（男子2名・女子4名）の学生のうちの2名で、図書館での授業はともに男子が担当した。担当学級は2年生の「古典B」（3単位）2クラスである。週3時間、2クラスを2週間でおこなうので、合計12時間しかないのだが、これを6人でやるので教壇実習は1人あたりわずか2時間となった。数年前から（少なくとも勤務校国語科では）このように一人の教諭が5～6名の実習生を指導する状態になってしまっているため、筆者は毎年「チーム浅田」と称して、「教壇実習が早い者も遅い者も、全員で全部を考え合い高め合いなさい。」と指示して、他の学生が授業を行う教材にも向き合い続けるように指導している。

実習内容を決めるまでの流れは、以下の通りである。

6月20日（火）に東京学芸大学の全学規模で、実習生に対する実習校オリエンテーションがおこなわれた。勤務校もこの日にオリエンテーションを実施している。まず午前中に、図書館も含め学校についての全体指導があり、午後には各教科での指導になる。国語科のA類の実習生は、その属性（男子か女子か、国語科選修か学校教育選修か、卒論で扱っているものは何か、所属ゼミはどこか、所属サークルはどこか、等）によって前もって指導教諭を決めておき、当日発表する。なお、B類は人数が少ないため、大学で事前指導の授業をおこなう教諭に全員当てている。筆者は、担当するクラス（2017年度は2年G組とH組のみ）も前もって配分しておき、当日伝えるようにしている。これは男女比や専門性の違いや趣味などが、なるべく偏らないようにするためである。

今回の教材は、清少納言『枕草子』のうち、教科書（教育出版『古典B 古文編』）所収の「かたはらいたきもの」「すさまじきもの」「九月ばかり」の3点。ただし、適宜原文の一部がカットされており、各教材とも教科書のページ数にして実質1ページほどの文章量になっている。これを、

G組：「かたはらいたきもの」＝実習生A、「すさまじきもの」＝実習生B、「九月ばかり」＝実習生C

H組：「かたはらいたきもの」＝実習生D、「すさまじきもの」＝実習生E、「九月ばかり」＝実習生F

がそれぞれ担当することになった。

その後、実習生6名を図書館に引率し、蔵書やネット環境などを下見させた。筆者が担当する教育実習生には、いつも「せっかく実習に来るのだから、与えられた時間を自分のやりたいようにやって良いです。必要な補足などは私が後でやるから、工夫を凝らして思い切りやりなさい。」と言っている。ただし今回は、「できれば1人か2人が図書館で授業をやるように、みんなで話し合って計画し、指導案を立ててほしい。」と伝えた。その後、G組とH組のそれぞれについて3人ずつ合同で作った指導案が送られてきて、実習生Aが「かたはらいたきもの」について、実習生Fが「九月ばかり」について、図書館で行うという計画になった。AもFも、ともに2時間目の教壇実習でおこなう計画であった。

## 3 勤務校図書館の概要

ここで勤務校図書館の概要について紹介しておきたい。見た目には普通の学校図書館で、一部私学のような豪

華さはないが、第一閲覧室と第二閲覧室があり、収容人員は最大140名。蔵書は、教員の研究室に置いてあるものも含めて、2017年4月現在28,694冊である。第一閲覧室には一般書籍、第二閲覧室には参考図書があり、その間に「中廊下」と称している廊下があって、ここには雑誌とCD・DVDがある。両閲覧室の書籍を使えば、高校生が学習に用いたい情報は概ね揃う。また、本校の蔵書で足りない場合は、東京学芸大学や同じ学芸大附属の他校から学内連絡便を使って貸し出してもらうことも可能である。ただし、授業でそれを使う場合は、届くまでに日数がかかるので、あらかじめ余裕をもって申請しておく必要がある。

蔵書検索性用パソコン（インターネット接続可）は中廊下にある。閲覧席には常設のパソコンはないが、校内で教員用・生徒用に用いられる端末（MacのノートPCとiPad mini）は、校内の教育工学委員会から貸し出してもらえば使用可能である。

蔵書検索システムは、2016年度まではユーリンク社のシステムで校内限定利用しかできなかったが、2017年度からはブレインテック社の「情報館」に切り替えた。これにより、校外からもネット経由で蔵書検索が可能になった。ただし、外部への貸し出しは不可としている。

また、校内の端末からのみ「朝日けんさくくん」と「Japan Knowledge」にアクセスが可能である。特に「Japan Knowledge」は、信頼できる辞書・百科事典・全集類が入っており、また、元の書籍が改訂されるとそれに合わせて更新される。そして、図書館に同じ本が1冊しかなくても、端末の数だけ調べられる。今回の実践ではこの利点を有効活用した。実習生への図書館授業の指導は、蔵書や、契約している外部データベースなどのリソースを使ったり、それらを用いた議論等を経験させられる点で、教師としての力量形成に資することができる。また、授業を受けた生徒にとってもコンピテンシー・ベースの様々な学びがある。その意味で、附属学校の図書館はもっと教育実習で用いられるべきだと考える。

#### 4 実習生A「かたはらいたきもの」の図書館授業

実習生Aの授業は、G組全体での2時間目でもあり、「かたはらいたし」が用いられている他の文学作品と『枕草子』を比較して、清少納言における「かたはらいたし」の特徴を考えるものであった。（[資料1](#)参照）

実際に扱った作品は、指導案とは異なり『宇津保物語』『紫式部日記』『蜻蛉日記』『栄花物語』『大鏡』『無名草子』『宇治拾遺物語』『徒然草』であった。使って良い資料は、図書館の蔵書（学内他校から借りてきたものを含む）と「Japan Knowledge」を中心に若干のネット上のサイトも含む（ただし、ネット上の各種サイトはあまり推奨しない）。用いた端末は、Mac Book Airを各班1台ずつである。

そして各班で比較をおこない、それぞれ考えたものを模造紙にまとめ、それを写真に写したデータをGoogle Driveにアップしてクラス全員で共有した。（[資料2](#)写真参照。）これは今回の教育実習のためだけのアカウントを筆者が取得したものである。そして、生徒に全部の班のものを見せたいうえで、改めて「清少納言における『かたはらいたし』にはどのような特徴があると思うか」を作文用紙に書かせ、実習生Aに提出し、コメントを加えたものを生徒に返却するという手順でおこなわれた。

しかしこの授業には大きな反省点を残すことになった。授業者（実習生A）は上記の各作品の文学史的な説明をするために、プロジェクターで国語便覧2ページをそのままコピーして投影した。筆者は、これをわざわざプロジェクターで、しかも生徒が持っている国語便覧（ただし、指示をしなければ持参してこない）のコピーを投影するとは聞かされていなかった。そのようなことをすれば、当然文字は見えない。そのため全部の作品の概要説明を口頭でおこなってしまい、そこまでが25分におよぶ講義になってしまった。結果、調べる時間が少なくなり、生徒は大急ぎで模造紙を作ることになってしまい、無理に終わらせる結果となった。

この反省を実習生全員で共有し、実習最終日に行われる実習生Fの授業に繋げた。

資料1

実習生 A の学習指導案（本時案のみ）

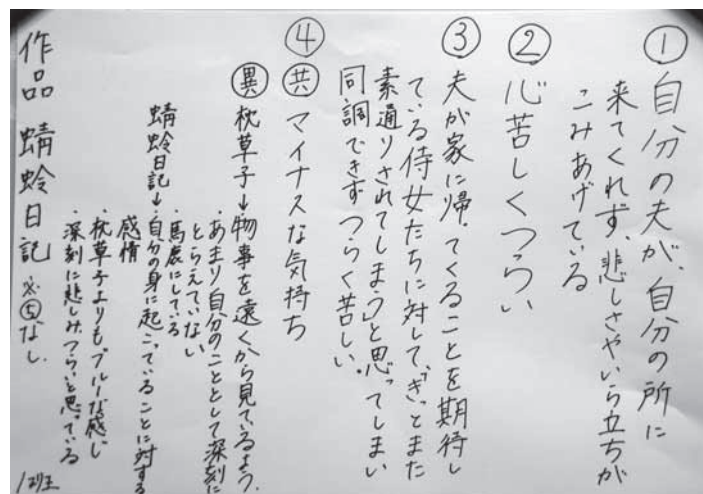
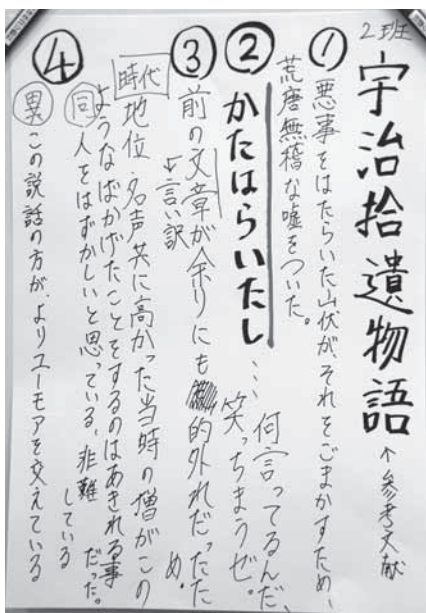
(1) 本時の目標

- ・他の文学作品におけるかたはらいたしと「片腹痛し」の感性を考える。（徒然草〈57段、232段〉、源氏物語〈若紫157、帚木21、桐壺129〉、枕草子〈135段〉、紫式部日記〈2章の8〉、蜻蛉日記を扱う。）
- ・「かたはらいたし」を中心に、各文学作品に隠れる感性を考える。

(2) 展開

時	○学習内容・学習活動	◇指導上の留意点 ☆学習活動に即した具体的な評価規準〔評価方法〕
導入 (10分)	○生徒のまとめた、清少納言の「かたはらいたし」の感性を共有する。	◇着席時から、8グループに分けて座らせる。 ◇スクリーンやプリント配布する等、全員で可視化する。 ◇模造紙とマーカーを配布。
展開 (25分)	○他の文学作品の「かたはらいたし」について、その意味をとらえる。 ○その文学作品の「かたはらいたし」の感性をまとめる。 T：図書館の資料等を活用し、各文学作品の成立背景などを紹介しながら、「かたはらいたし」の対象や意味を考えましょう。	◇8グループに分けて、取り組ませる。（各文学作品の担当部分） ◇フォーマットを示し、それに沿わせてもよい。（作者、成立年代、語の意味、そこから考えられる作者の背景、その他で構成。） ◇図書館の蔵書資料を活用し、担当になった作品について調べさせる。 ☆各古典作品、現代の語の感性から、考え方をとらえる。（ア）〔成果物、行動観察〕
まとめ (15分)	○「かたはらいたし」の感性を作品、年代ごとに全体に共有する。 ○「かたはらいたし」の意味を考える。	◇各作品の作者、成立の背景、文学作品の性質を踏まえてまとめさせる。 ☆各文学作品から得た考え方を踏まえて、「かたはらいたし」の意味について考えている。（イ）〔成果物、行動観察〕

資料2 生徒がまとめた模造紙の例



5 実習生 F 「九月ばかり」の図書館授業

実習生 F の授業は、彼にとっては2時間目の授業だが、H組全体での8時間目でもあり、『枕草子』の最終時でもあった。前時に生徒に考えさせた清少納言の性格や考え方を、「九月ばかり」の他『枕草子』の他の章段や、

先行研究などを踏まえてグループで考え、各自が考えて付箋に記し、模造紙上でカテゴリ分けして、それを発表する。(資料3参照) 使って良い資料は、実習生 A と同様、図書館の蔵書(学内他校から借りてきたものを含む)と「Japan Knowledge」である。今回は、ネット上のリソースは「Japan Knowledge」に限定した。用いた端末は、iPad mini を各班1台ずつであったが、当日は iPad mini の機材トラブルがあり、いくつかの班が廊下にある蔵書検索用デスクトップ PC を用いてこれの代用とした。

手順としては、各班で作った模造紙を使って発表させ、かつこれも写真にして Google Drive でクラス全員が共有した上で(資料4写真参照)、それらを見て改めて全員が「清少納言論」を書くという課題である。これは実施日自体も教育実習最終日だったため、筆者(浅田)に翌週の締切日までに提出させ、まとまった段階で実習生 F に送ることにした。

この授業に至るまでに、実習生 A の図書館授業での反省に基づき、「チーム浅田」の実習生全員で「今度はどうすればいいか?」をよく話し合っこの日を迎えた。もちろん、他の4名の実習生の教壇実習をおこないながら並行して話し合っていた。初日はプロジェクターに映した映像中の字が小さいとか、そのためにしばらく閲覧室を暗くしていたため、図書館で授業を行うことの利点が半分以上活かせていなかった。そこで、今回は筆者の指導も加えた上で、①プロジェクターは使わず、暗くもしない。②古典文学作品自体は、基本的には『枕草子』のみを用い、その各章段から目につくものをピックアップして読んでみる。その際は図書館の蔵書または「Japan Knowledge」上の『新編日本古典文学全集』(現代語訳つき)を用いる。他の作品の説明はしない。③先行研究図書を集めておき、それらは適宜使用してよい。この3点に絞った指示を出させた。

結果として、高校生としてはよく考えられた「清少納言論」を、各班とも展開できるところまで導くことができた。

### 資料3

#### 実習生 F の学習指導案(本時案のみ)

#### ■本時のねらい(6/6)

- ・清少納言の性格について調べる活動を通して、清少納言に関する理解を深める。

#### ■本時の評価

- ・清少納言について積極的に調べ、グループとして考えたことを発表することができる。

#### ■本時の展開(6時間目/全6時間)

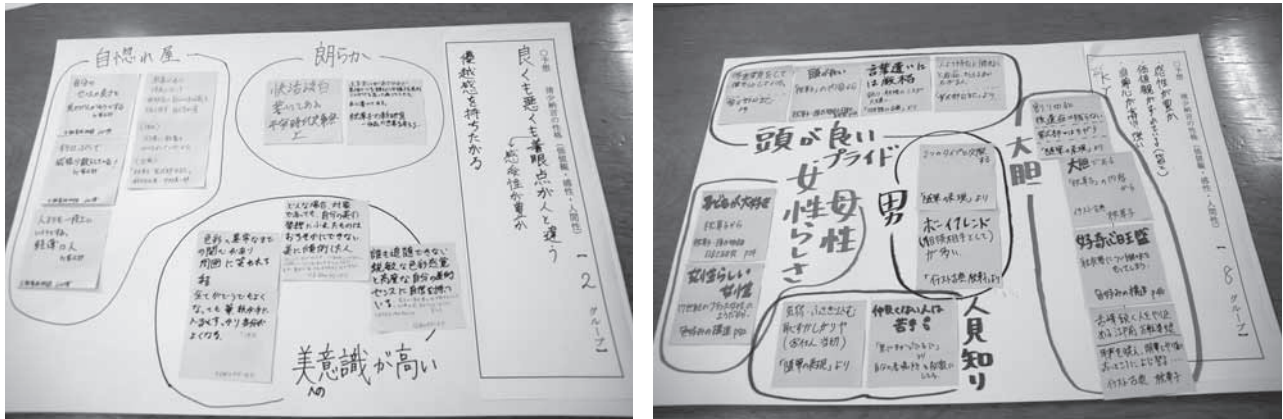
時間	○学習事項	指導上の留意点(◎)手だて(◇)評価(◆)
導入 (5分)	1. 目的を明確にし、活動の手順を確認する。	◎付箋の書き方や活動の手順を説明する。 ◎前時のまとめで生徒が発表した清少納言の性格が本当にそうなのか、他にも違う一面があるのか、さまざまな文献から考えさせる。
展開 (30分)	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px; text-align: center;">清少納言の性格は本当に○○○(前時のまとめ)なのか調べよう。</div> 2. グループ別の活動 <b>【活動1】</b> 清少納言について書かれた作品を読み、清少納言の性格についての情報を集める。 <b>【活動2】</b> 集めた情報をもとに、カテゴリごとに分類する。	◇グループに1枚ワークシートを配り、付箋を活用することで、情報を視覚化し、整理しやすくする。 ◎情報が少ないグループには、机間指導でサポートする。 ◆清少納言の性格について積極的に調べることができる。 <b>【関心・意欲・態度】</b> (ワークシート)

まとめ (15分)	3. まとめ ○各グループごとに発表。	◇カテゴライズした分類（性格）とその根拠にしたもの（作品・文）を発表させる。 ◆グループとしての考えを発表することができる。【関心・意欲・態度】【知識・理解】（ワークシート、発表）
--------------	------------------------	---

☆準備するもの：付箋，ワークシート，本

☆図書館で使用する本について・・・清少納言の性格について言及しているものや性格を想像できるものを使用する。平安時代～現代の作品まで幅広く扱いたい。（※先生方と相談）

**資料4** 生徒がまとめたワークシートの例



**6 おわりに**

国立大学附属学校にもいろいろなタイプの学校があるが、実習生がたくさん来る学校では、全員に図書館授業を経験させることは難しいかもしれない。しかし、教師の力量形成の観点からすれば、図書館（そこにおけるICTも含む）の活用をぜひ経験させたい。実験系・実習系の授業では難しいが、ともすれば一般教室での座学のみになってしまう教育実習を、単に「ごく普通の授業」にするだけでなく、「学校のリソースを活用した活動」を伴ったものにすることができれば、これは望ましいことと考える。

これは同じチームで一緒に考えている実習生はもちろん、当日授業見学に来た他の実習生にも刺激を与えることができ、この授業に接することのできた実習生全員の視野を広げることができる。実際、「図書館で授業とは攻めているなと思った。」「自分は高校時代に図書館で授業を受けたことがないので、こんなやり方もあるのかと感心した。」という前向きな授業見学感想が多く見られた。その一方、「自分の高校時代には図書館で授業を受けるような、わざわざ時間をかけることはなかった。もっと能率よく読解力を鍛える方がいいのではないか。」という近視眼的な見学者もいた。しかしこういう実習生にも、自分の高校時代の学習経験を越えたものを見せられた点では、長い目で見ると良い刺激になったはずである。

こうした学習は、生徒のキー・コンピテンシーを育てる学習につながる。先に「1」において、キー・コンピテンシーの①と②には特に深く関わると述べたが、図書館において、解決すべき課題を蔵書やICTを活用しながら、グループのメンバー全員の力を結集して解決していくプロセスを経験することによって、①～③のすべてが身についていくことになるかと筆者は考えている。

生徒自身にその方向性での学習を積み重ねていくことが今後はこれまでに必要になってくるが、それを経験していない実習生（および大学院生や現職教員）にも経験させることで、今後の生徒の教育に資する教員を養成できる。教師教育の充実、結果として将来の学習者の学力の向上にも資することになるわけである。その観点からの教員養成の充実を目指していきたい。

[注]

- 1) 東京学芸大学の「先生のための授業に役立つ学校図書館活用データベース」には、たとえば「教育実習生によるブックトーク」(<http://www.u-gakugei.ac.jp/~schoolib/htdocs/index.php?key=jonyzpil1-115>), 「教育実習生からの相談」(<http://www.u-gakugei.ac.jp/~schoolib/htdocs/index.php?key=jo5rdkupl-118>) などが掲載されている。(ともに最終閲覧日は2018.1.26)
- 2) [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/016/siryu/06092005/002/001.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/016/siryu/06092005/002/001.htm) (最終閲覧日: 2018.1.26)